

「やり方」より「あり方」
社会福祉法人 大阪誠昭会 寝屋保育園 理事長 田中啓昭

何かものごとを始める時に、形(やり方)から入る人と、気持ち(あり方)から入る人がいます。子育てにおいては、どちらが良いのでしょうか？

子育ての順番

先日、こんな本を読みました。「ディズニーと三越で学んできた日本人にしかできない「気づかい」の習慣」(上田比呂志著)。そこに登場した言葉が、まさしく私が思う子育てにおける親のかかわり方と一致していたので、紹介します。「三つ心、六つ躰、九つ言葉、十二文、十五理で未決まる」。これは、江戸時代の「子育てしぐさ」という丁稚の小僧を



まずは心のあり方を教えましょう

らいたちは立派な大人として扱われた年齢ですから、これらももつともなことですね。

この言葉から、「心、躰、言葉、文、理」という順番が大切だということがわかりますよね。そこで、この中で私が大切にしたい部分は「六つ」までの間、つまり乳幼児期です。まず

は、子どもに心を教える必要があるということ。そして次に、その形を教えなさいという順番の必要性。加えて、躰という形式だけを教えるとはいけないというメッセージを感じるので。

心を育てる

挨拶を例に見てみましょう。子どもに形(ここでは躰と同義)から教えて、大人には「おはよう」ではなく、「おはよう



大人がお手本を示します

ございます」というんだよ、と細かな型から教える方法。形式も大切ですが、まずは挨拶する意味(言葉を交わす・気持ちを交わす)ことを教える方法。全てにおいてそうではありませんが、まずは「なぜそうするのか」という「心」あり方」を教えることが、子どもの自分軸を育てていくことになるのだと考えます。

とはいっても、乳児にこのようなことをいきなり教えるのは到底無理なこと。まずは親が手本となる動作をしつつ、「人に会ったら、こうするんだよ」と、態度や行動で伝えていく。そして、ある程度ものの道理がわかる3歳ぐらいの年齢になったら、「なぜそうするのか」「そうすることで、どういう影響を及ぼすのか」といった本質を伝えていくことから始め、それらができるようになってから、細部にこだわる

躰を教えるのもよいように思います。そして何より、幼児期の子どもにとっては形式にこだわるより、次につなげていく楽しみや興味(意欲)が大切です。ご飯の食べ方も、形式ばかりをブツブツいわれて食べてもおもしろくありません。ましてや乳幼児が大人のように、上手におはしやスプーンを使って食べるなど一朝一夕にできないですよ。だから、まずは意欲を尊重していくことで、「本質を理解するための心」を育てていくのです。形は後からその都度、教えていけばよいのです。

これって、よくよく考えてみると子育てだけではなく、仕事においてもきっと同じことがいえるのではないのでしょうか。今の時代だからこそ、「やり方」より「あり方」を大切に心の教育をしていきたいものですね。



『ディズニーと三越で学んできた日本人にしかできない「気づかい」の習慣』
上田比呂志 著 クロスメディア・パブリッシング
定価 1,449円(税込)